

「朗読決勝課題」

「劇場がのうなつてしもたら、なにもでけへん」

大きな衝撃を受けた天外てんがいは、膝をついてうなだれ、表情もなくつぶやいた。

千栄子は、「今、弱気になったらあかん」と、崩れ落ちそうになる自身の気持ちを叱咤する。

劇場よりも芝居よりも大切なものがある。先生の命や。先生を絶対に死なせたらあかん。うちが守ってみせる。命さえあればきつと立ち直ることができる。必ず、できるんや。

（葉山 由季 「大阪のお母さん」―浪花千栄子の生涯―）中

「代役の日々」